

●ムスリムの人々の宗教上の義務「ジハード」。日本では「聖戦」と訳されていますが、本来は「奮闘努力せよ」と云う意味の様です。しかし今日では、異教徒との聖なる戦い—として—一義的に解釈され、使われています。私達がこの言葉を、そのような意味＝聖戦＝で耳にし、目にしたのは今から35～36年前のアフガン戦争辺りからですので、日本人にとっては、比較的最近使用され始めた感の強い言葉に感じられますが、少なくともクリミア戦争(1853～1856)では、今日的意味合いのジハードは既に使用されており、決して20世紀や21世紀になって、新解釈が施されたのではない事が判ります。●それにしても「異教徒との闘い」(十字軍)と云うのは中世の話であり、中々理解できない処があります。それだけ根が深く、遺伝子に組み込まれる程深層化した、制御不能な念慮だと云われれば、確かにそうなのかも知れませんが、世界中に広がりを見せるこのような「回帰主義」的傾向には、不気味さと危うさを感じざるを得ません。日本も再び戦前の、治安維持法下の弾圧の時代(1925～1945)に逆戻りするのではないかという不安さえ頭をよぎります。

●従来の社会規範や社会常識では理解できない、想定外の事態が相次ぐと不安が増幅蔓延し、強いリーダーを求める傾向が強まり、一人の人物の出現で世の中がガラリと変わる—と云うのは、よく知られた経験則です。混沌として先が見えない時代には、誰もが責任ある立場に立つ自信が持てない—だからこそ、多少極端でも、根拠の怪しい断定でも、自信ありげな発言をする誰かにその役割を負ってもらえば、自分は矢面に立たずに息を潜めていられる…前文で触れた、不安定な社会情勢の背景には、この様な出口の見えない逼塞感が漂っている様に思われます。では、そのような逼塞感があるとした場合、それが金融業界の問題とどう繋がっているのでしょうか？●銀行や信金等の金融業は、典型的な許認可業務であり、金融庁・日銀のオモシから逃れられない宿命を背負っています。一体、誰と向きあって仕事をしているのか？と云われる程、彼らの視野には顧客が入っていない事が多いのです。そこには、バブル崩壊後のりそな国有化や大型合併による金融再編等、環境変化に敏感にならざるを得ない事情があり、円滑化法による時限措置終了後の今も、地銀ベースでの再編が進みつつあるという現実があります。その為、つい最近まで行われて来た金融行政—金融検査マニュアル絶対主義—の下で彼らは、極端に保守的な、縮こまった融資姿勢(担保無しでは貸さない・少しでもリスクなら融資を引き上げる等)に終始していました。●処が、金融庁長官が替わった途端、検査マニュアル—辺倒の方針は、根底から覆される事となったのです。氏の発言は次の様なものです。「規模が全てではありません。小さい信用金庫や信用組合でも、素晴らしい経営をして収益を確保しているところは多い」「コンプライアンスは重要ですが、あまり行き過ぎると、かえって金融機関が金融庁の方ばかり向いて創意工夫がなくなる」「50の金融機関があれば、やり方は50通りあっていい。本当に法令順守ができていない金融機関には是正するよう言い続けますが、既にできているところにそれを言っても行政の付加価値にはなりません」「金融機関に対しては”企業に付加価値を付け、成長を助けてください”と云って来ました。金融機関に聞けば”やっています”と言うので、本当かどうか企業にも聞いてみようと考えました」●これは、連続3期の決算書で融資の可否を判断する等と云う時代遅れの銀行は要らない、企業の実情を聞き取り、アシストせよ—というメッセージです。独裁者とは正反対の、優れた一人の人物が、陋習や悪弊を一掃する—という、近頃珍しい、歓迎すべき好事例と云えます。